

1947年10月の岡山市街の写真

民俗建築アーカイブ担当

The photos of Okayama City in October, 1947

Editorial Committee

本学会前会長の佐藤重夫先生（以下敬称略）は、昭和21年に通信省を退職して郷里岡山に帰り、設計事務所開設と共に復興院の嘱託になって、市街地の被災調査に奔走した。復興院とは昭和20年11月に戦災都市の現状調査と復興を進める目的で作られた国の機関であり、昭和22年12月31日まで存在した。昭和23年1月1日から建設院となり、その後、建設省に変わった戦後を象徴する機関である。

岡山市は昭和20年6月29日の早朝、B29爆撃機138機による焼夷弾攻撃を受けた。これによる家屋消失は12,693戸、死者は1,737人に上った。街の姿は無残にも消え、人々はバラックの建設に動いている。佐藤は街の復興と共に、この様子を記録に残さなければならない責任を感じた。佐藤は市街の状況を撮影し、それと共にスケッチした。佐藤建築事務所の近くにある内山下小学校は当時、岡山市役所仮庁舎として使われていた。この屋上からは岡山市街が一望に見える。佐藤はさっそく屋上から西の岡山駅方面をみた写真を撮り（写真1）、同時に写生して淡い水彩画に仕上げしてみた（屏風図1）。当時の岡山市の建築課長であった原田倫道氏が佐藤の絵を見てその見事さに感心し、ぜひ、四方の風景を12枚の絵にまとめるように提案した。実は11月末から昭和天皇が中国地方5県を巡幸されることが決まっていた、岡山市は12月9日、10日に巡幸される。原田氏は天皇陛下に岡山市内の復興現状をご説明するのにこの絵を使うことを思いついたのだ。四周をパノラマにして六曲一双の屏風に仕立てて陛下にご覧いただく考えである。佐藤はこの話を聞いて感激した。ただ、今から取りかかっても完成までには相当の日数が必要だ。その間、他の仕事も入ったりして絵にばかり時間を費やすことは出来ない。佐藤は一瞬迷ったが至上の誉れと責任の大きさに身の引き締まる思いで取り組み始めた。それから時間があれば屋上に上がり四方を12等分して写真撮影とスケッチに専念した。10月31日に市役所の屋上で最後の下図を描き終えた時のことを佐藤は次のように語っている。

「あとは自宅で写真と照合しながら色を付けてゆくのだが、これがまた大変であった。その頃は毎日毎夜の停電でほとんど真っ暗になる。3時間ほど点くのみだから仕事ははかどらない。11月2日の夜は久しぶりに電気がついたので写真の焼き付けを始めた。しかしまた停電のため6枚程しかできずに終わった。11月3日は朝5時～6時の間電気が来たので写真焼き付け、昨夜の続きをした。写真を参考にして11月4日から毎晩鳥瞰図と取り組み、16日にやっと完成した。出来上がった絵を改めて見て、これを陛下にご覧に入れるのかと思ったとき、言葉に言えない緊張と誇らしさを感じた」とある。

ただ、天皇陛下のご巡幸の当日は、佐藤ははるか遠くから様子を眺めていただけだったが、後日、陛下の近くにおられた橋本富三郎前岡山市長から「陛下は長く時間をおとりになって、12枚の絵とご説明に頷かれていた」と聞かされ、感激した。橋本氏は佐藤に「春山の 画にして四方 空深き」の一句を贈って佐藤の労をねぎらってくれた。このときの屏風は岡山市立図書館に保存されている。

それから28年経った昭和50年1月、佐藤が広島大学を定年退官するため研究室を整理していたとき、スケッチの原画と絵の細部を画くために基盤目を入れた当時の写真12枚が出て来た（写真1）。そのとき佐藤は昔の記憶をたどりながら写真の説明を書き残してくれている。説明の冒頭に「バラックで一応復興した市内を陛下に見て

いただくのに便利のように無数のバラックの中の特徴的な建物や場所をなるべくお解り易いようにと心がけたために写真よりもかえって当時の様子を良く忍ぶことが出来るところもあると思っている」と記されている。

写真の説明 (昭和50年2月 佐藤重夫記)

「昭和22年12月戦災都市行幸に際して画いた岡山市鳥瞰図下図について」

(1) N No.1点より (図1参照)

正面の山は古刹金山寺のある金山で、左麓には水源配水池や法界院の並んだ岳が見え、その手前の森は北方にある前方後円墳の神宮寺山古墳の森(天計神社)である。右手には赤い山陽本線の旭川鉄橋が見え、その右は現在は住宅やホテルのある西川原から浜のあたりで、この頃は広く田園や畑のあった処である。旭川左岸堤防は昔は桜が多かったのに裸になってはいるが、それでも長閑な河原をそえていて、絶好の子供の遊び場であった。手前の橋は鶴見橋で、昔は夏にこの欄干から飛込水泳をする子供もあった。それほどに河底は深いのに、橋の上から見下ろすと底に鮎の走るのが見えたものである。手前の瓦屋根のお家は焼け残ったが、その左の方の岡山神社あたりは焼けてしまった。画面右下の畑にされたり、荒地のままになっている部分は現在緑地に整備されている焼跡である。

(2) NNE No.1点より

後楽園入り口の鶴見橋東詰から東、後楽園の西半分を見たところで、昔なつかしい浩養軒という岡山では高級な西洋料理店の緑青がふいた銅の屋根が見えている。この前を通ると和風と一寸異質な香料等の香りがして、明治大正文化の食慾をそそったものである。その右方、手前には延養亭、墨流し、鶴鳴館などの日本建築があったが、焼失して木立が重なって見えるばかりである。しかしその木立もいささか荒れて、枯木、枯枝が目立っている。これらの向うの山波は竜の口の山で、その左の谷の間から旭川が手前の岡山平野に流れこんで来ている。桃の花と河の曲がりど、竹藪で美しい里であった玉柏はこの竜の口山の北裏にあたり、見えない。手前の旭川左岸の後楽園散歩道は荒れているが、川面の水色のみは木立の影を映して、いつまでもわれわれを救ってくれていた。

(3) ENE No.2点より

この画面は旭川左岸の後楽園裏の散歩道がちらちら見えるところのもので、ボートの舟宿が二艘岸に繋いであるところが見える。そのボート屋の左手に後楽園の裏門があって、そこから川舟の渡し舟がお城の裏の河岸に通っていた。戦前の渡し賃はいくらであったか忘れてしまったが、戦後はどうなっていたのでしょうか。後楽園とお城裏との間にその後トラスの鉄橋が出来て、現在に至っているが、私はその当時橋の形について反対したものであった。この画は後楽園中央部の沢の池の方面にむいたものであるが、池は木立にかくれて見えない。そうしてその木立の向うには、原尾島の部落がちらっと見え、ずっと向うに百間川などととも田園地帯が広く見えて、現在の東岡山駅の長岡方面の方に続いている。手前のバラックの地帯は現在市民会館が出来ている処にあたる焼跡である。

(4) E No.2点より

これは真東を見たもので、操山頂上の三勲神社がある峯を右寄りに見て、その左手向うには遠く東山連山の一部であり、また内山の曹源寺の北手にあたる最高部の笠井山方面を眺めているところである。操山の北の中腹には後楽園の借景中心である国富、瓶井の多宝塔が見え、その左手にはすぐ眼の前の国宝の月見櫓が焼失をまぬがれているところが画かれている。この櫓の手前右は本丸跡の遙拝所ともいって、閑谷神社のある古い松が茂った閑静な高台で、石垣の上であり、石段がついていて、よく蟄蛙(どんびき)などが山歩いて子供たちに喜ばれた処である。手前はNHKの建っている処であるが、当時は住宅の焼跡に土蔵とそまつなバラックが見えている。左端には天守閣裏の伝い道に渡し舟の着くところが旭川の水面とともにちらっと見えており、うっそうとしていた緑の樹木や竹藪は裸に焼け、切り荒らされて昔の静けさはない。

(5) ESE No. 3点より

これは内山下小学校屋上の東南端より東南東を見たもので、右手前の大きな土蔵はお堀の石垣の上に無事消失をまぬがれた池田家の道具蔵である。その上に見える黄土色の壁は焼け落ちた岡山市公会堂の壁体、その左側には製氷工場が見える。相生橋はこの工場の蔭で見えない。画の中央の鶯緑の部分はお城の内堀で、その左側は第一岡山中学校の校庭でその向うは旭川の堤になる。ずっとむこうの遠景は古京方面で久保の酢、岡崎の酒の醸造用の煉瓦煙突などが見える。その向うの山が操山で、麓に第六高等学校の焼け跡が松の間に見える。その右方は玉井宮の丘から奥市公園方面にあたる。また画面中央左よりの平らな緑色の部分は閑谷神社南下のお堀で、戦災の瓦礫の捨場にされてしまって埋められ、現在山陽放送局舎の東の駐車場になり下がってしまった処にあたる。移れば変わるもので今昔の感にたえないものといえよう。

(6) SSE No. 3点より

右手に金甲山が遠望される手前の丘はNHK旧岡山放送局のところ、そのアンテナ塔が見え、その手前は右から京橋、中橋、小橋が連なっている。この小橋の東方に国清寺の森が見え、なおその左、旭川左岸の土堤に見える四角な建物は焼けなかった小橋町の市立図書館で、現在の公民館、その左手向うに見える工場らしい建物は門田屋敷の岡山紡績の焼け跡である。手前の大きな土蔵は池田家で、その右は焼けたお屋敷のバラックで白い土塀が石垣の上に巡らされている。焼けた測候所の観測塔はこの画面の右端のあたりでもう見えない。また旭川右岸でこの画面の中央あたりには昔の社交クラブ、後の榊原病院があったがこれも見えない。右手前の道の手前左側に折れた石垣の下にはお城の石山門があったが、この屋根も今は焼けて見えない。現在ここからは、池田家の蔵の向うに大きく岡山県庁舎が聳えて、操山配水池のある丘などが見えないであろう。

(7) S No. 4点から

手前に長く見えるバラックは内山下小学校校庭の南に造られた臨時校舎の一部で、その向うは内山下から京橋方面にかけてのバラックである。左端に京橋が見える。その上に遠く網の浜方面のお墓がいっぱいある丘が望まれるが、旭川の下流を大きく渡した高圧線鉄塔が何本もあって南の郊外の変電所に連っていつている。旭川はその架線の下をくぐって、ゆるく左に曲り流れている。画面左端の高い山は児島の金甲山で、その手前右には児島湾が細く光って見える。右端の大きな煙突は城下、<sup>うちさんげ</sup>内山下の日赤病院棟の端部にあるもので、その左にのぞく、向うの建物は中国銀行本店の裏側であり、その左に水色の水面が見えるあたりは旭川右岸の船頭町から二日市方面で、製紙会社や監獄のあったあたりで、ずいぶんと遠くまで眺められている。現在は大廈高樓が多くあってどのように見えるのであろうか。

(8) SSW No. 5より

中央に焼けて黒く焦げた大建築は当時の最大の建物であった天満屋百貨店の第一期の建物である。屋上のステートリンクがあった部分はまだ改修工事中であることが見える。その右手の遠くに茶色っぽく三つばかり長手のコンクリート棟がのぞいているのは岡山医大である。画面の左端には常山が見え、その下の手前の茶黄色の建物は日赤病院である。手前の緑の樹木は内山下小学校の一部の木で、枯れ枝のままの松も見えている。なんといても表八ヶ町にしろ、全市は殆んど戦災バラックばかりで、一応ながらよくも復興したもの、遙かに米倉方面の田園が細く見えるのみである。また、画面の左端日赤病院の上の処には、以前見えたはずの紙屋町の鐘楼もない。捨て鐘三つで時の鐘を年中、日夜を問わず打ちならしてくれていた。堂守の厚い心はなつかしい音とともに忍ばれるが、世の心はどう変ってよいものであろう。

(9) WSW No. 5点より

画面の右手よりにある四注の屋根を架けた赤いタイル貼りの四角い家は昔の銀行の焼け跡を修理した建物で、やがて丸善書店がここに支店を出された上之町の中央部である。画面の中心の黒い建物は岡山電話局、その左は岡

山郵便局のコンクリート3階建て、ともに柳川筋の角地にある。右手前の本瓦葺屋根は現在残っている国指定重文、岡山市内最古の建物である岡山城西丸西手櫓の屋根の南妻である。その左は上之町、中之町、そして細堀通りなどのバラック商店街、現在の表町界限である。左端の遠くに煙草専売局が見え、なお遠く妹尾崎方面の丘陵地帯が眺められる。今は国道2号線バイパスが横切っている地帯であるが、桃畑などの美しい丘の並びで当時の長閑さを今はしのおよしもない。切り崩された団地には家はまばらで水田地帯はスプロール化である。郵便局の向うが蓮昌寺の方向になるが、現在は高層ビルがいっぱいであろう。

(10) W No.6点より

城下から真西へ向った駅筋の電車通りを見透したもので、上之町と中山下の電車停留所の間と、磨屋町のあたりとで、電車線路は右左に曲っていて、突き当りの岡山駅前終点は隠れて見えない。この終点の右手に黄土色の旧岡山駅の矩形の建物が見えている。正面の中央には縦長のガラス窓が数本ついていて、そのあたりは鉄道の煤煙で黒くなっていた。電車通りの北側、右手の白い建物は石造の昔の十五銀行、後に後ろに引家された現在の三井銀行で、左手の黒い建物は防空上戦時中に黒く塗られた銀行である。画面の左端の遠くに見えるのは岡山駅の南にあった紡績工場で、現在はカバヤ食品になっている。画面下部中央の赤い傘のようなものは城下交叉点の中央にあった電車停留所乗換待合所の屋根で、きしむ車輪の音と電車のチンチンという音が聞こえるようではないでしょうか。現在はこの電車通りは直線に拡幅されている。

(11) WNW No.6点より

右端近く、大きな建物が半分画かれているものは勸銀支店（現第一勸銀）で、その左の方には裁判所や法務関係の木造二階建ての建物が大きく見えている。その左の窓から吹き出た火焰で真黒く焼けた五階建は昔の県立図書館の書庫の跡で、その左は女子師範や、史蹟岡山藩学跡の地帯にあたる。藩学の門もちろん焼けたが、残った畔池や石の橋なども荒らされ、史蹟の石などもバラック地形に盗まれたりした。手前のバラックの波は弓之町、上之町あたりで、甚九郎稲荷があるところ、池田家と共に古い本行寺は裁判所の向うで柳川筋にあった。遠景の丸い禿げ山は京山で、現在京山公園となってケーブルカーのあるところ、池田動物園がその左の麓にあるところである。そうして備前一宮から遠く高松稲荷の方の山波までその左方に望まれている。山には高圧線の鉄塔が見え、なんとなく復興のエネルギーを送ってくれるように思えた。

(12) NNW No.7点より

左端の石造建物は勸銀（現在の第一勸銀）で、その右には工事用の丸太足場が見える。これは岡山農地事務所庁舎工事のためのものであって、その右が東警察署である。まだ増築のされない前でその左手の遠くには弘西小学校のうす緑色、横に筋のある建物がちよつとのぞいて見える。遠景のいくつも起伏のある丘は半田山で、麓には現在岡山大学になっている旧師団があったところ、その頃には進駐軍が使っていたはずである。近景の一角は石関町で材木の間屋さんなどがあった処である。遠く画面の左端の山裾あたりは真備女学校などのあった津島のはずれで、春には遠くからでも桜で白く見えたものであるが、津山へ行く国道はこの左を回って北へと延びている。旧練兵場の周囲や、旧師団方面の樹木が、それでも山麓を包んでバラックの向うに見えているのは、やがてこのあたりがスポーツ、文教の中心になる記でもあろうか。

「民俗建築アーカイブ」の写真・資料をご希望の方は下記へ申し込んで下さい。無料で提供します。

民俗建築アーカイブ担当 古川修文 syu-bun@jcom.home.ne.jp